

公開セミナー「“国際”再考—グローバルとローカルのあいだ—」報告

大岩 圭之助

本公開セミナーは、2019年10月～11月にかけて計7回開催された。各回、ゲスト講師を学外から招き、聞き手・コメンテーターとして1、2名の国際学部教員があたった。

各回のテーマ、ゲスト講師、聞き手・コメンテーターは以下の通り。

10月1日：「エクストリーム・ローカル：地域を掘れば地球の裏側に出られる」

森まゆみ（作家、市民活動家）＋平山 恵、大岩圭之助

10月8日：「リベラル保守の可能性」

中島岳志（政治学、東京工業大学）＋高橋源一郎、大岩

10月15日：「グローバルとローカル 江戸時代から学ぶ」

田中優子（江戸文化研究、法政大学）＋野口久美子、大岩

10月29日：「民主主義と地域」

國分功一郎（哲学、東京工業大学）＋高橋、大岩

11月12日：「メキシコ発 “しあわせの経済”」

パトリシア・モゲル（生態学・メキシコ、ミチュアカン大学）＋大岩

11月19日：「グローバルからローカルへ コミュニティ・デザインという考え方」

山崎亮（コミュニティ・デザイン）＋大岩

11月26日：「グローバルからローカルへ：食と農の視点から」

藤原辰史（農業史、京都大学）＋高橋、大岩

広報文は以下の通り。

危機の淵に立つ世界は、好むと好まざるとに関わらず、グローバル化時代の終焉という大きな曲がり角にさしかかっている。来るべき「脱グローバル化」と「再ローカル化」に向けて、まずは、いつの間にかグローバル化し、均質化し、大地やコミュニティから遊離し、「トポス（場所性）」を見失って、根無し草となっている自分たち自身の頭と心と体を、再び着地させ、根付かせなければなるまい。そのためにも、もう一度、国や社会の「際（きわ）」に注目し、文化と文化、地域と地域との「あいだ」から世界を見つめる態度を取り戻さなければならない。

「“国際”再考—グローバルとローカルのあいだ—」というテーマと問題意識

まず「“国際”再考」というテーマを提起するにあたっての問題意識を表現したものとして、
ぼくが『雑の思想』（高橋源一郎・辻信一、2018年、大月書店）の「はじめに」に記した文章
を引用したい。

……国際学部も「雑」と縁の深い場所だった。創設第一世代の教員たちの中には、単にそれ
ぞれの専門分野での業績だけでなく、それをはるかに超えた雑多な領域で活躍したこと
で知られる「雑学」者たちが多かった。

「国際学部」の替わりに「民際学部」という名称を提案したのは、創設に参画した異色
の経済学者、玉野井芳郎（1918～1985）だったという。本書に度々登場するカール・ポ
ランニーを日本に紹介した人であり、人類学、エコロジー、そして経済学の間を自由に行
き来した人だ。「国際」の「際」とは「きわ」であり、「境界」である。国と国の間は、普通、
国境と呼ばれる線で区切られて、曖昧さ（雑）は忌避される。それが国の論理というもの
だ。しかし、国境の両側に広がる地域の民衆には、国の論理を超えた、豊かな草の根交流
の長い歴史がある。……（中略）……「国際学部」という名称に落ち着いたにせよ、「際」
という境界から世界を見ていこうとする態度が、その後のわが学部のあり方の中に、何ら
かの形で受け継がれてきたのだと思いたい。（前掲書、P.5）

国際学は英語で International Studies である。しかし、私見によれば、「国際」という概念の
中身は、90年代以降、国際学部内外の多くの人々のうちで次第に英語の“international”から
“global”へと変容していったのである。また、従来、本学部において、「地域研究」がカリキュ
ラムの一つの柱をなしていたことにも表れているとおり、教員、研究者たちの意識の中で、
international と local とは切っても切れない緊密な関係にあったはずだ。それが、international が
global に取って代わられるのに従って、国際学における local は、次第に意識の中のマイナーな
場所へとおいやられていったのではないかと、ぼくは感じてきた。そしてグローバリゼーション
が世界を席卷する時代の果てに、ぼくたちは今、global と local とが、巨大化した格差の両極へ、
そして支配／被支配構造の両端へと引き離され、引き裂かれている様を目の当たりにしている。
だからこそ、国際学部に身を置くものとして、今一度、「国際」という言葉について考え直し
てみる必要があるのではないか、というのが、「“国際”再考」というテーマの背後にある問
題意識だった。

ぼくはかねがね、「グローバリゼーションの終焉とローカリゼーションの時代」はすで
に始まっていると考えている。現に世界には、グローバリゼーションへの抵抗の動きが激しく
なっている。メディアを中心とする表面的な解釈によれば、「グローバル」に対する主要な対
抗軸は「ナショナル」なのである。そして、この「ナショナル」の台頭に対して、主要メデイ

アの多くは、自由と民主主義への挑戦として、かつての「国家主義」への退行として、警戒を強めている。だが、グローバリゼーションへの対抗は、「ネーション」へと逆行することを必ずしも意味しないはずだ。確かに、世界のあちこちに台頭したナショナリズム、ポピュリズムに支えられた独裁的政権、排外主義的な機運などは、グローバリゼーションへの反発をエネルギーとしているように見える。

しかし、今やますます限界を露わにしているグローバリゼーションの終焉を見極めて、さらにそれを超える変革の可能性は、「ナショナル」にではなく、世界中で勢いを増すばかりの様々な草の根的運動にこそあるのではないか、というのがぼくの見立てである。ナショナリズム志向の“反グローバル”（例：トランプ現象、ブレグジット）は、実は、「拡大・成長」の継続と利潤極大化を志向する点では、グローバリゼーションを牽引してきた新自由主義と本質的な相違はない。それに対して、「グローバル化の終わりの始まり」を真に表現しているのは、環境、持続可能性、ローカルな共生、コミュニティの再生、格差是正などを志向する「脱グローバル」の動きなのである（例えば、京都大学の広井良典）。その動きは多様性に富んでいるが、その全体に共通する特徴として、食・エネルギー・福祉の地産地消（例えば、内橋克人の「FEC自給圏」）を軸とするローカルへの志向がある。それは部分的な仕組みの手直しにとどまらない、社会全体に及ぶホリスティックな転換を意味しているだろう。ぼくはそれを一言で「ローカル化（ローカリゼーション）」と呼ぶ。

改めて、グローバリゼーションとは何か。それは「ネーション」と「ネーション」の「あいだ」を市場の名において取り払っていくことを意味する。今では不興をかこっている「インターナショナル」という言葉に、そして「国際主義（インターナショナリズム）」の「国家を超える」というかつての“理想”に、未だ意味があるとすれば、それは「ナショナル」と「ナショナル」の「あいだ」、国家と国家の「あいだ」、に注目することを通じて、「ナショナル」を相対化し、捉え直し、超克するという営みとしてではないだろうか。

ではどこへ向かって「ナショナル」を超えるかといえば、「ローカル」へ、である。「より大きく、より多く、より速く、より遠く」から、「より小さく、より少なく、より遅く、より近く」へと、である。「グローバル」から「ローカル」へという流れに沿って、「インターナショナル」は、「インターローカル」へと進化するだろう。「地球」と言う美しい言葉を掲げた「グローバル」という言葉がやっと輝き出すのはその時だ。真の意味でのグローバル時代はまだこれからなのである。それは、気候変動をはじめとする人類史上最大の危機を超えるための努力が人類を一つにしたと感じられるときに、やっと見えてくるのだろう。

もう一点、上の引用の中でも触れられているカール・ポランニーと玉野井芳郎との関連で触れておきたいことがある。周知のように、ポランニーは自己調整的市場という幻想とその破綻が、二つの世界大戦の勃発や全体主義の台頭と密接に関係していたことを明らかにした。そして社会から「離床（dis-embedded）」して“自由”になった経済が、もう一度、社会の中へと「埋め込まれる」（re-embedded）べきことを構想した。経済的自由主義についてのこのラジカルな批判を日本で引き継ぎながら、新設される明治学院大学国際学部の中へ持ち込もうとしていたのが玉野井だったのではないかとぼくは考えている。エコロジー経済学の日本における先駆

者でもあった玉野井は、ポランニーの「経済を社会へ埋め込む」という問題意識をさらに一歩進めて、「経済を生態系へ埋め込む」、さらに「社会を自然へ埋め込む」というヴィジョンを描いていたのだろう。

またこれと関連して、もう一つの「際」をもつ言葉、「学際」もまた国際学部には欠かせないコンセプトだったと思う。英語のインター・ディシプリナリーである。この間専門性という特徴が重要視された創設時の国際学部では、文化、経済、政治という教員の専門性を踏まえた三群の区分についても、それぞれが“ミニ文学部”や“ミニ経済学部”や“ミニ法学部”と化して、“タコツボ化”しないようにという強い意識が共有されていたと思われる。特に、「国際学部における経済学」については、文字通り、間専門性の「あいだ」に経済を埋め込む、という玉野井の思いが少なからぬ影響力をもっていたのではないか。残念なことに、学部構想に参画した玉野井が創設された学部で実際に教壇に立つことはなかったが、彼の考えはレガシーとして生きてきた、と考えたい。

玉野井とも親交のあったイヴァン・イリイチは、「パクス・ロマーナ（ローマ支配下の平和）」や「パクス・アメリカーナ（アメリカ支配下の平和）」という表現の延長上に、「パクス・エコノミカ」という言葉を作った。「経済支配下の平和」を意味するこの言葉こそ、今日のグローバル化の本質を言い当てているだろう。

ポランニー風に言えば、平和を経済支配のくびきから解き放って、逆に、平和の中に経済を埋め込み直す、ということになるだろう。同様に、特定の専門分野を通じて研究や教育に携わるほくたち一人ひとりに、文化を、政治を、法を、福祉を、倫理を、文学を、芸術を、そして社会そのものを経済支配から解き放つ努力が求められているのに違いない。そもそも、経済学自体もまた、パクス・エコノミカから自らを解放してはじめて、本来の姿に立ち戻ることができるのではないか。

「国際再考」とは、こんな風に、「国際協調」や「平和共存」といった従来のそれとは異なる平和へのアプローチを志向した創設当初の国際学部のあり方を思い起こしながら、現在から未来に向けてのその存在意義を再吟味することだと思う。そうした知的営みを通じて、「国際学」に新しい展望が開けるのではないだろうか。

以上、2019年度の公開セミナーのテーマと問題意識について述べることで、附属研究所の所長からの報告とさせていただきます。

なお、7回にわたって行われたセミナーは全て音声記録として残されている。その文字起こしは、現在（2020年3月末）も継続中である。ほくは間もなく退職するが、今後もその成果を国際学部の教員や学生諸君へと還元するために、必要だと思われることをさせていただきたいと考えている。